

天と空のあいだ

川名幸宏

登場人物

フランク ……サーカスの仕様人
エミー ……同上
バベル ……サーカスの空中ブランコ乗り

*この作品は、フランツ・カフカ「最初の苦悩」から着想を得て執筆したものです。

がらんとした劇場、サーカスのテント
どうやら上に誰かいるよう

ひとり遠くを見たり、足をぶらぶらさせたり

特に何をするわけでもなく

それは彼の日常にすぎないような

そこに劇場主と新入りのフランクが入ってくる

フランクは劇場の使用者として働くようだ

あれこれと劇場主が説明する

エミーが入ってくる。使用人の先輩

あとはこのエミーに聞いてくれと劇場主は去っていく

フランク はじめまして。フランクと言います。今日からこのサーカスで働く

ことになりました。よろしくお願いします。

エミー よろしく。私はエミー。

フランク エミーさん。

エミー さんづけしなくていいよ。

フランク え。

エミー いろいろ面倒じゃない。こういうのってはじめが大事でしょ。私の
こと一生先輩だと思って話さなきゃならなくなるわよ。

フランク はあ。

エミー 年は。

フランク え。

エミー 年齢よ。

フランク 17です。

エミー 今年17？

フランク はい。

エミー え、やだ、同い年じゃない。

フランク あ、そうなんですわね。

エミー 20世紀とともに20歳になる世代。

フランク 今年が1898年だから、あ、そうか。

エミー じゃあ尚更いいんじゃない、そんなかしこまらなくても。

フランク はい。

エミー このサーカスで私たちが一番若いわ。子役と動物以外では。文字通り私たち下っ端扱いだけどこっちは下っ端風にする必要なんてないの。だって同じ仕事なんだから。そうでしょう。

フランク はい。

エミー あんた「はい」しか言っていないけど。

フランク はい。

エミー もういいわ。そのうち慣れるでしょ。あ、それから上のやつも同年。

フランク 上のやつ。

エミー ほら、上のやつよ。

フランク 彼は。

エミー バベル。

フランク バベル。

エミー 空中ブランコ乗り。

フランク じゃあ今練習中。そうか邪魔しちゃったってこと。

エミー いいのよ。24時間ずっと練習中だから。

フランク え。

エミー 上に住んでるの。

フランク あそこに？

エミー そう。

フランク ご飯は。

エミー 誰かが持ってかないと死んじゃうわね。

フランク トイレは。

エミー 誰かが下に降ろさないとこの劇場が肥溜めになっちゃうわ。

フランク 誰かって。

エミー 私たちよ。結局私が一番下だからお世話係はわたしになるわね。あ、

でもこれから晴れて私たちになるのね。だって私たち同い年なんだ

もの。

フランク どうして上で。

エミー 本人に聞いてみれば。

フランクは上に目をやり

エミー ねえ、聞いてたでしょ。フランクが質問あるって。

フランク よせよ、いや、ないから大丈夫です。

エミー そう、私たちも質問したいことが山ほどあるけど、ないことにしてるの。だからどうして上で生活してるのか誰も知らないのよ。

フランク いつから？

エミー バベル、質問よ。

フランク よせよ、君に聞いてるんだ。それぐらいわかるでしょう。

エミー 1年前ぐらい。

フランク 何かあったの。

エミー 公演中にブランコから落ちこちたの。って言ってもネットに落ちただけだから擦り傷一つなかったのに。あの日を境に上から降りてこなくなつたのよ。はじめは何のことかと思つたわ。もともと無口だったし、練習熱心で上にいることが多かったけど。みんな帰るって言うてるのになかなか降りてこなくて、まあそのうち降りてくるでしよって思って次の朝来たらまだ上でブランコを漕いでるの。

フランク 練習熱心の極みってこと。

エミー そうかもね。

フランク 実は僕も彼のブランコに憧れて、それで働かせて欲しいって頼み込んでんだんです。

エミー バベル、聞いた。表情はないけど内心めっちゃ喜んでるわ。

フランク あれ、喜んでるの？

エミー わからないけど、そう思ったほうが楽しくない？

フランク そうだけど。

エミー バベルのブランコは私たちも一目置いているの。そりゃ見たら分かるでしょ。誰だって思うわ、素晴らしいって。ブランコはこのサーカスの花形。なれるのはごく限られた人間。だからこそ、誰も降りて

こいとは言わないし、言えないわよ。結果世話しようってことにな
って、こうしてものを運んでるの。

エミーがものを上にものを運ぶ。

フランク 変だよ。

エミー そうね、誰がどう見ても。フランクが降りてって説得してよ。

フランク それは。

エミー みんなそうやって言わないの。

フランク でも。

エミー 私は言ったんだけどね。いやだって。

エミーがバベルの話を聞いている。
ボンボンしゃべって聞こえない。

バベル ###

エミー そう。

バベル ###

エミー わかった。そっちは。

バベル ###

だんだんとエミーも同じように小声になり聞こえない。
何やら話しているが、いきなり。

バベル 嫌だ！

エミー しようがないじゃない。

バベル 嫌だ！

エミー 私もどうしようもできないのよ。

バベル 嫌だ！

エミー わがまま言わないで。じゃあよろしく。

バベル 嫌だ！

エミー じゃあね。

エミーが降りてくる。

フランク 何か怒ってるみたいだけど。

エミー ちよっとね。ってことで明日はよろしく。

フランク え。

エミー 明日、友人の結婚式なのよ。どうしても出たくてどうしようかと思
ってたんだけど、ちよっとよかった。

フランク いやいやいや。

エミー 大丈夫よ。そんなたいしたことじゃなかったでしょ。はい、これが
明日のメモ。ここに欲しいものが書いてあるから揃えて上に持って
くだけ。で、次の日のメモをもらって、トイレ袋を下に下ろして
く。あ、これがトイレ袋だから。降りるとき手を滑らせないように
気をつけてね。それから、欲を言えばちよっとだけ話し相手になっ
てあげたら百点満点かな。

フランク 僕なんか頼まずにベテランがいくらでも、だって僕2日目で。

エミー 何度か他の人に頼んだんだけどね。その度に大げんか始まっちゃう
のよ。

フランク え！

エミー あ、言い忘れてたけど、バベル、私以外ともう1年ろくにしゃべっ
てないんだけど心配しないで。

フランク 心配するでしょ！

エミー ちよっと、私先輩よ。同い年だからって調子乗らないで。

フランク さつき気使うなって。

エミー 礼儀つてものがあるでしょ。

フランク めちやくちやだ。下っ端風にする必要ない。同じ仕事なんだからっ
て言ってたのに。

エミー そう、だから、これがあなたの明日の仕事。誇りをもってやってね。

フランク 無理だ！不可能だ！

エミー ごちやごちやうるさいな。ファンなんでしょ。

フランク そうだけど。

エミー 本当にお願ひ。幼なじみの結婚式なの。あなたにしか頼めないの。

翌日。

フランク やむなく引き受けた。

バベルとフランク二人。

フランク おはようございます。

バベル

フランク あのー、昨日から入りました、フランクと言います。よろしくお願
いします。

バベル

フランク バベルさん、ですよ。えー、今日から、私フランクが、担当させ
ていただくことになりました。

バベル

フランク あのー、何かからしましょうか。

バベル

フランク え、え。

バベル

フランク え、何か言いました？

バベル

フランク そうですよ、言っていないですよ。

バベル

フランク あ、あ、そうですね。

バベル

フランク あのー、これから、よろしくお願いします。

バベル

フランク 僕は今、苦悩している。ここに来て最初の苦悩だ。

あいつだ、あいつに苦悩している。
バベルだ。

空中ブランコ乗り。このサーカスのスター。
そのスターは、星にでもなったつもりか、下に降りてこない。
一瞬たりとも。空に住んでる。

ロマンチックに聞こえることって大概常人には理解できない。
星になるためにトイレにもいかないなんて。

トイレはすぐそこじゃねえか。どうかしてる。

そして面倒な匂いしかない。

初めのうちだ、雑用どんときやがれと思っていたけど

こんなの圧倒的に雑用よりタチが悪い。

でも、僕が初めて任された仕事なわけで。